騎士と姫

末吉安持

青空文庫

春の弥生の夜は仄(ほの)に
天地(あめつち)ひくゝ垂(た)れあひて、
情(なさけ)のにほひいちめんに
おぼろおぼろの花ぐもり、
精舎(しやうじや)の壁の地獄絵(ぢごくゑ)も
温(ぬる)き霞(かすみ)を纏(まと)ふらむ。

森の木立の月かげを
避けて、まぶかき黒鉄(くろがね)の
甲(かぶと)に、なほも色白(いろじろ)の
面凛々(おもてりゝ)しく、瑠璃青(るりあを)の
瞳(ひとみ)きよげに、花ぐさを
わけつゝしのぶ騎士(きし)ひとり。

『たそがれがたの戦闘(たゝかひ)に
十騎の敵を殺したれ、

胸にさしたる紅薔薇（べにさうび）
二輪色濃（りんいろこ）くちりもせず、
西（にし）の丘（おか）なる陣指（さ）すと、
悠（ゆう）に見かへる敵の城。

時しもあれや、矢は一つ、
空鳴（そらな）りしつつ、ひとばかり、
鎧の袖に触れて落つ。
赤き塗り矢の根のかたに
如何なる人のざれわざぞ、
にくき文こそ結びたれ。

『貪（むさぼ）るものにこの穢土（ゑど）は
あはれみ給へ、将軍よ、
少女が胸のなさけには
国土（こくど）、山河（さんが）も何ならむ。』
とばかり読むも短檠（たんけい）の

火かげまばゆくおぼえしか。

まだ我が知らぬ酔ひごこち、
こは夢かとて立ちよれば、
壁に懸けたる我が盾に、
うつれる影は怨敵(をんてき)の
かなたの王の一の姫
乱れし髪の※(らふ)たしや。

癡(うつ)け果(は)てじと投げぬれば
盾は音して砕けたり。
第二の盾を手にとりて
見ればここにも不思議さよ、
うつれる姫は浮足(うけあし)に
わが前にしも身を投げて
よゝとばかりに縋り泣く。

『あゝよし、さらば天地(あめつち)も
有情温(うじやうぬる)みの春の夜の
花のくもりに溶(と)け去りて
一如無相の海となれ、
愛の御龕(みづし)に、姫が手(て)に、
いまぞ楽しき罪を得む。』

城の濠(ほり)なる切崖(きりぎし)も
夢の心地にくゞり来て、
瞳すかせば、木がくれに
さやさやとなる衣摺(きぬずれ)や、
姫は荒磯(ありそ)のこほろぎの
藻(も)によるごとくすがりけり。

花の木の間(ま)にうぐひすは
夢の世をしも歌ひたり。
蜜の如くにやはらかき

うまし二人のくちづけよ、
あゝ怨敵と怨敵は
天と歴史を無みしつる。

『青史の帙に御座する
神もいまさば、などてこの
戦闘あらぬ初めより、
怨恨をむすぶ敵軍に、
かゝるくしびの力もつ
姫ありとしも告げざりし。』

『みゆるしたまへ、父の王、
汝がいとし子の魂の花
咲きくゆりぬる功徳のゆゑ、
明日より後のたゝかひに
王が馬蹄は十国の
土を隈なく印しなむ。』

『王よ與へむ、天が下、
汝が利心の飽くまゝに、
血汐に餓うる戈さきを、
十国の城に、百国の
民の頭に、柔らかう
口づけさせて、取り統べよ。』

『国の王者にあらずとも、
かゝる雄々しき恋人は
真の人ぞ、あゝ今は
われも真の人の妻。』
二人をめぐるそよ風は
百千の花の香を吹きぬ。

青空文庫情報

底本：「沖縄文学全集　第1巻　詩※［#ローマ数字1、1-13-21］」国書刊行会
　　1991（平成3）年6月6日第1刷
入力：坂本真一
校正：フクポー
2018年3月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

騎士と姫

末吉安持

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/